

特集
居ごちの
よい住まい
その3

ケーススタディ

飛驒の
人と木工に
魅せられて

地方に 寄り添う 住まい方

2階から吹き抜け越しに、薪ストーブがある1階リビングを見下ろす。家で最も居心地のいい場所が愛犬ももの定位置だ。

都会を離れて自ら選んだ土地に住まうことにした人は、

どのように土地に根ざし、

住まい、暮らしているのだろうか。

東京から飛驒古川に移り住み、

古民家との出会いを機にものづくりの道へ進んだ
浦西正幸さんの家を訪ねた。

取材執筆／大山直美 撮影／川辺明伸





山々に囲まれた岐阜県北部の飛騨地方は、豊富な森林資源を生かした木工が盛んな地域。古くは万葉の昔から優れた技術を持つ大工「飛騨の匠」が活躍し、近代以降は洋家具メーカーが次々に誕生、日本有数の家具産地として発展してきた。

飛騨の中心地である高山で、自社工房製のオリジナル家具や地元作家が手がけたクラフトなどを扱う店を営む浦西幸さんは、今から約20年前、この地に魅せられて東京から移り住んだ。高山の隣町、飛騨市古川町に構える住まいは自力で古民家を再生したものだという。雪深い1月、現在は妻と生後8カ月の長女、愛犬の3人＋1匹が暮らす浦西さん宅を訪ねた。

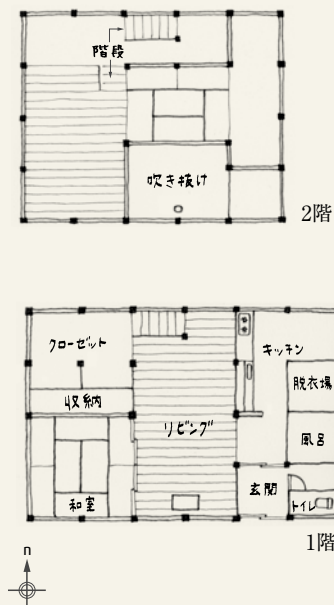
古民家との 出会いを機に、 ものづくりの道へ

浦西さんの出身は大阪で、地元の大

学を卒業後、東京で服飾雑貨などの企画開発に携わっていた。地縁のなかった飛騨への移住のきっかけは、環境問題に興味を持ち始め、自然を大切にしたいものづくりに携わりたいと思っていた折に、飛騨の家具工房の先駆けとして知られるオー

クヴィレッジの稲本正さんに誘われたことだった。移住に迷いはなく、新しい仕事も楽しかったが、家具職人と関わるうちに、自分も手を動かしてものづくりに携わりたいという思いが強くなったという。

そんな矢先、自らの思いをぶつける格好の対象に巡り会った。不動産屋で偶然見つけた1軒の古家だ。釘一本自分で打ったことがない素人だったが、



浦西宅の間取り図。蚕部屋だった屋根裏を2階とした。吹き抜けを新設し、その下に薪ストーブを設置。光や暖気や家族の気配が全体に及ぶ一体の空間を実現している。

大工見習いの友人に「半年もあれば改築できるのでは」と言われ、勢いで購入した。特に大変だったのは、解体・基礎工事だった。骨組みだけになるまで剥がすのに約1年。それから基礎を補強するため、コンクリートの材料を

上／玄関には地元飛騨の作家による張り子の鯉が飾られている。中／冬、住まいは雪に覆われる。下／古い道具や金具も空間を演出。

釘一本打ったことがなかったが、手に入れた古家を3年がかりで大改修。手作りの楽しさを知る経験が人生を変えた。



古いもの、地元のをうまく調和させた空間。
上／梁に飾られているのは骨董品の小皿。
下／玄関側から見たリビング。正面奥にある和室との間仕切りには古い建具を再利用し、岐阜の美濃和紙を貼った。



自らがけたからこそ、より愛着が持てる住まいが完成した。

「最初のうちは抜いて曲がった釘まで叩いてまっすぐにして使っていました。全部壊して建て替えた方が早いと皆に言われましたが、古いものを残して生かすという価値観を大切にしたかった」

古民家との出会いは、生き方をも変えた。家づくりという創造を通して「生きている実感が味わえた」という浦西さんは、ものづくりの道を追究しようと、職業訓練校で木工の基礎を学び、木工房や家具メーカーでの修業を経て、家具工房を開設するに至ったのだ。

ものづくりの町・飛驒には木工に限らず、陶芸、ガラス、染織などの職人が集まる。浦西さんは持ち前のコミュニケーション能力を生かして積極的に関わりを持ち、歴史や文化にふれることで郷土愛を深め、生粋の飛驒の人に勝るとも劣らぬ「飛驒人」になっていた。

「初めから、せっかくななら、田舎のしがらみ」を楽しもうと思っていましたし、古川はもともと外の人を受け入れる素地があるんですよ。祭りの日には、知らない人にもご馳走を食べさせてくれる『呼び引き』という風習があるんです。『ゆざらい』という地域ごとの用水路の掃除も、いまだに総出で行います。道も川も自分の家の一部だと思えば、ゴミも捨てないし、きれいにするのは当たり前なんです」

ローカルな生活を大切にしたい。引越して3年目ぐらいから、畑も始めました。手をかけた暮らしをしたいと思っているんです」

東京では毎晩飲み歩く日々だったというが、いまは飲みに行っても、途中で帰りたくなってしまふと笑う浦西さん。それは、居心地のよい巣のような住まいを自らの手でつくりだしたからだろう。夫婦だけの時期が長かった後に授かったゆえか、子育てにも余裕が感じられる。赤子と犬がいるとは思えないほど、室内には穏やかな時間が流れている。雪に覆われた斜面越しに、外から浦西さんの家を見ると、ゆらゆらと煙突から上る薪ストーブの煙が、さながらスイートホームの象徴のように見える。

聖美さんは言う。「こんなに雪深く、娯楽も少ない田舎のどこがいいのかと思うほど、夫は飛驒のことを好きになってくれ、地元にとっぷり浸かっている私たちが気づかない飛驒のよさを発見して、一生懸命盛り上げてくれる。そういう夫に対して、近所の人もすごく親切にしてくれるんです。朝起きたら玄関前に野菜が置いてあったりして、結婚当初はわらしべ長者みたいだと思いました（笑）」。地元の保存会で教わった味噌づくりを同年代の友人たちにも広め、自家製味噌の味を楽しんでいるという。

古民家との出会いを通じて、飛驒の

手をかけた暮らしを通して、飛驒の魅力を伝えていく

こんな浦西さんの家づくりに、地元高山出身の妻・聖美さんが加わった。出会ったのはまだ家ができた前だったが、和裁を仕事とし、手仕事や古い道具が好きな聖美さんは左官用の鋺（こ）で壁に下地材を塗ったりする施工の手伝いは楽しかったと語る。



2階の様子。
右／一段高い右手中央には和室を設けた。左手北側の窓は新たにあげ、本棚とソファのある読書コーナーをつかった。左手前は妻・聖美さんの和裁用の作業机。
左／梁は現しにし、古民家の風情を残した。

すっぱり雪に包まれた住まいの内部に一步入ると、そこはほっこりと暖かな空間。古民家といっても純然たる和風ではなく、薪ストーブや、店のオリジナル家具である一枚板の大テーブルが置かれた和モダンのインテリアだ。センスよく飾られた古い家具やクラフトはほとんどもらいものだという。

「和と洋のいいところを取り入れました。薪でお湯を沸かせれば素敵ですが、現実的ではないので、ユニットバスにしています。便利さとのバランスが大事です、できるだけ土地に根ざしたすっぱり雪に包まれた住まいの内部に一步入ると、そこはほっこりと暖かな空間。古民家といっても純然たる和風ではなく、薪ストーブや、店のオリジナル家具である一枚板の大テーブルが置かれた和モダンのインテリアだ。センスよく飾られた古い家具やクラフトはほとんどもらいものだという。

自分がつくる家具だけでなく、仲間たちが手がけたクラフトも含め、飛驒のものづくりの魅力を発信していきたい。

飛驒の魅力を伝える浦西さんの店。
右／多様な樹種の一枚板はテーブル用。
左／地元作家のガラス器等も扱う。

飛驒コレクション高山店
岐阜県高山市
上岡本町3-3-62
<http://www.hidacolle.com/>



夫妻は目下、長女・美空ちゃんの子育て中。3人＋1匹の日々が紡がれている。

